# 長野県・満島（みつしま）収容所

## 捕虜生活と解放の記録

チャールズ ・F・ ウィリアムズ
アルフレッド ・A・ ワインスタイン
オリバー ・L・ ゴードン

名倉有一編

## 原田源燈（はらだげんと）班長

収容所を出るのは朝６時。通常の場合[29]、夕方６時より前に戻ることは禁じられていた。しかしわれわれの班長(hancho)のハラタ・ゲントさんは、各組に対し、トロッコ 16 杯のノルマを与えて、達成すれば（はっきり日本語を覚えていないが「コモレ(Komore[30])」と言って）収容所へ戻ることを許した[31]。

（池田［徳眞（のりざね）］さんはニューヨークで〔戦後再会したとき〕、「日本にはそんな〔ゲントなどという〕名前はない」と私に言った[32]）

【手紙 3】あなたがハラタ・ゲントさんの家族と連絡がとれたと聞き、私は大いに喜んだ。ハラタ・ゲントさんの監督下で働いた捕虜は皆、彼のことがたまらなく好きになったものだ。彼こそ本当の紳士だ。

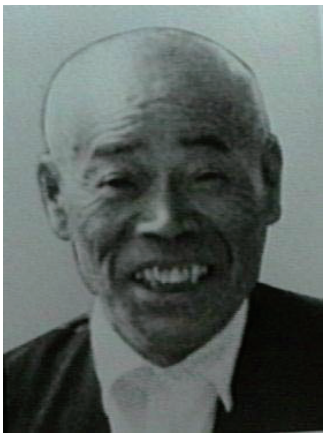

**図 32 原田源燈［1899-1970］**
**提供：原田博夫**

29 悪天候の場合、作業が中止または打ち切りになったというほかの捕虜の記述がある。

30 「これまで」、か。

31 ○こうしたノルマによる管理について：作業実績に不満足な日本側に対して当初米国人捕虜から「請負仕事(contract work)」が提案され、受け入れられたとの記述がある。［前掲“*Horyo*”. p.177.］
○実際に運用が始まると、早くノルマを達成するとさらに追加の仕事を要求する日本側に対して捕虜が反発し、トラブルとなったという。［同 p.177-179.］
○以下は推測。ほかの班長は、以前の作業時間による管理に戻した。一方原田はノルマ制にメリットを感じ、彼なりのやり方で継続していたのではないか。

32 p.173.「［資料 J］ニューヨークの金平牛蒡（きんぴらごぼう）」参照。

班長のやり方は、岩石を巻き上げるためのウインチがある坂の下までトロッコを運ぶと切符を１枚くれる、というものだった。切符は鷲の銘柄のタバコ[33]の箱を半分に切ったもので、班長の私印が押してある。衛兵は皆このタバコを吸っていたから、空き箱を手に入れるのは難しくない。そこでわれわれはマラヤから来た福建省系中国人 (Hokien Chinese)を説得し、生の芋で印を偽造してもらった[34]。偽の切符は控えめに使う必要があるが、用心して利用したことでわれわれの負担は大幅に軽減された。

ハラタ・ゲントさんは背が低く肩幅が広く、蟹股。陽気でやさしい性質だったから、われわれは皆彼のことが大好きだった。「フロッグ〔カエル〕」というあだ名で呼んでいた。彼は切符を作業用前掛けの小袋(pouch)に入れていた。休憩の時、われわれのうちの誰かが彼を遊びでレスリングに引っ張り込んだ。その最中に彼の小袋に手を伸ばして切符をつかみ、周囲の見物人に手渡した。満島を離れてからも私は、「フロッグ」はわれわれの企みを知っていながら大目に見たのではないかと考えることがあった[35]。彼は善人で思いやりのある人だった[36]。

【手紙４】彼は、仕事量を減らすためにとったわれわれの策略を知っていたと思う。ごまかしを大目に見てくれたことをとても感謝して一種の紳士協定ができ、われわれは許容される限界を超えることはしなかった。彼が亡くなったことはとても残念だ。彼を知る私の当時の仲間たちは、彼のことを敬意と愛情をもって記憶していくだろう。彼は大声で叫ぶことも、いじめることもしなかった。その結果、同じ作業場にいた別の班の荒っぽい班長たちよりも、彼はもっと私たちから仕事の成果を引きだすことができたのだと思う[37]。

---

33 金鵄。マークは鷲ではなく日本書紀に登場する鵄。 p.161.「［資料 D］偽切符つくり」参照。

34 「［資料 D］偽切符つくり」参照。

35 「知っていたと思うなあ。オヤジは学はなかったけど人情味はあったよ」。〔長男原田博夫の話〕

36 巻末 DVD No.1「原田班長の思い出」参照。

37 「満島収容所の工事現場で、原田氏のような方に巡り合ったのは幸運でしたね。どこの収容所にもこのように人情味ある人が必ず１人か２人いて、彼らの行為がどれほど捕虜たちの心を慰め、励まし、生きる気力を与えたかという話をよく聞きます。それを支えに生き延びたのだと。「親切だったあの人に会いたい、お礼を言いたい」と言って日本を再訪する元捕虜たちも多いのです。こういう話を聞くたびに感動し、自分だったらどうするだろうか、どんな状況下でも人間らしい心を持ち続けることができるだろうかとよく考えます」。〔連合軍捕虜研究家・笹本妙子からの E メール〕

## 運搬作業

工場のセメント生産が枯渇し[41]、次の貨車の到着まで待たなければならない日もあった。そんな日はセメント倉庫の隣にある大きな倉庫で働かされた。

セメント倉庫に隣接するそうした倉庫には、満島(みつしま)の村落やその周囲に点在する収容所(other camps)の食糧が貯蔵されている。大きな丸いワラの袋の中には米、小枝の編み細工には麺類(めんるい)。製粉された白い小麦粉が入っている袋もあった。小麦粉の袋はわれわれが運ぶセメント袋より少し小さく、重さは 25 キログラムほどだった。

食糧倉庫の向こうには金物倉庫があり、ダムの工事現場で使う道具類やクギ、ボルト、針金といった品々が保管されている。これら２棟の倉庫で働く日本人労務者がいた。われわれは仕事がない時、金物倉庫で働く彼らに呼び出されて積み上げや分類の手伝いをさせられた。重量のある補強棒、溶接網、鋼鉄製の横架材(おうかざい)などの運搬は捕虜数人がかりで駅前から「ゲンドー(Gendo)」という[42]坂を下り、橋を渡って現場まで行った。台車(flat cars)に載(の)せて坂の下まで降り、橋の上を押して行き、ある地点からウインチで巻き上げ、必要な場所までまた人の力で運んだ。

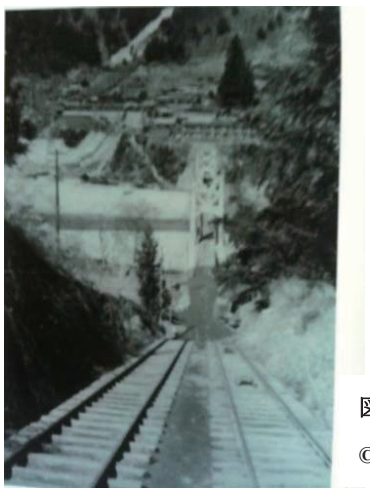

**図 33 インクライン**
**©北澤(きたざわ)小太郎／提供：北澤洋太郎**

---

41 p.162.「[資料 E] セメント生産の下降」参照。

42 ○「当時の満島駅のすぐ南にあった『インクライン』という施設〔「図 7 平岡ダムと周辺図」参照〕だと思われる。『ゲンドー』という言葉を当時村にいた人に聞いたが、「記憶にない」とのことだった」。〔天龍村教育委員会の回答〕
○天龍村ホームページには、インクラインについて以下の記載がある。「平岡発電所を建設する際、滑車(かっしゃ)で荷物を運搬した道。現在もインクラという地名で残っています」
○前掲”*Horyo*”に、著者が当時登り降りしたインクラインを戦後再訪する話がある。[p.148.]

## 駅での盗み

われわれが食糧倉庫で働くことはなかったが、中にいる日本の労務者はいつも戸を開けっぱなしにしていた。鉄道の引込み線のポイントはこの倉庫の戸口のすぐ向こうだったから、押している貨車を前で停車させて誰かが中に忍び込み、小麦粉袋をつかんで貨車に投げ、中で待ち構えた仲間の捕虜が空袋に入れ、きれいに包んで半分サイズのセメント袋(half bag of cement)に見せ掛けることが可能だった。獲物は倉庫の本物のセメント袋の下に素早く隠した。この作戦の開始後間もなく、われわれは縦 10 袋、幅５袋分のスペースを、注意深く積んだセメント袋と倉庫後方の壁の間に確保した。壁の外から駅の下の道までは 10 メートルほどの高さだ。セメント倉庫の線路を跨(また)ぐ反対側には、木炭を入れた丸い籠(かご)を収納する別の木造倉庫があった。南京錠(なんきんじょう)が掛かっていたが、われわれは壁板を１枚こじ開けて大量の木炭を手に入れることができた。次に拾(ひろ)ってきた古い灯油缶でオーブンを作り、こうして一九四四年の秋にセメントが届かなくなるまでの間、お茶当番は英空軍の丸い食器を使って毎日イーストなしのパンを各人に１つずつ 11 個焼く。〔収容所入口の〕衛兵所の検査で見つかる恐れがあったから、パンは駅で食べてしまう必要があった。

しばらくすると食糧管理者(rationing authorities)が疑いを持ったのだろう。倉庫の戸締りが厳重になったので、われわれは「黄金の機会」を待つことになった。これには、次の２つが同時に起こる必要がある。即ち、

（１）われわれが貨車を押しながら食糧倉庫の前を通りかかると、

（２）日本人が戸を開けたまま作業をしている。

こんな時貨車は食糧倉庫の前で停車し、不思議なことにまったく動かなくなる。われわれは倉庫の中にいる日本人に声をかけ、「一緒に貨車を押してくれよ。俺たちだっていつも手伝っているじゃないか」と頼む。貨車は日本人が全員手伝いのために倉庫から出てくるまで、どうしても動かない。われわれは勿論貨車の倉庫側を占(し)め、仲間の一人がそっと倉庫へ忍び込み、小麦粉を１袋失敬して貨車に投げ込む。袋はすぐ隠される。車輪を止めていた石の障害物が外され、貨車は戦利品を載(の)せて動き出す。われわれのセメント倉庫での作業は終了しつつあったが、こうして一九四四年のクリスマスのころまでには、倉庫の中に本物のセメント袋よりも多くの小麦粉の袋を隠していた。

その２日後の一九四五年９月２日[74]、クロムウェルの日(Cromwell's day)[75]にそれぞれの荷物を持ってわれわれは駅へ行進し、浜松行きの列車[76]に乗り込んだ[77]。親愛なる友人「おかあちゃん(Ma)」、美しい駅長助手さん、駅の班長、それから「フロッグ」原田源燈さんに心をこめて別れの挨拶をした[78]。抱擁や握手が続いた[79]。

【手紙９】この〔撤収〕作戦の間、私がとても混乱し茫然としていたことが分かるだろう。記憶では、われわれは午前 11 時ころ[80]満島駅へだらだらと歩いた。

列車の窓の外を過ぎる天竜川の谷を眺め、缶詰の肉と野菜（鯨の肉と海藻）を食べた[81]。

【手紙１０】列車の旅の途中、ソースに漬けた肉と野菜が入ったブリキの缶詰を支給された。肉は鯨肉、野菜は海藻だったが、文句を言わずに指を使って食べ、缶から汁を飲んだ。どうやって缶を開けたか覚えていない。車窓を過ぎていく田舎の風景を眺めていた。みんなとても静かで、これから何が起きるかを考えることに没頭していた。

---

74 ９月４日。

75 p.43.脚注 61 参照。

76 正確には静岡県新居町駅行きの特別列車と思われる。 p.171.「［資料 I］帰還列車」参照。

77 満島駅出発時の新聞報道は見当らなかった。［県立長野図書館の回答］

78 ウィリアムズは原田源燈から印半纏を餞別としてもらった。巻末 DVD No.1「［動画 B］原田班長のプレゼント」参照。

【手紙１１】こうした上着を日本語で「印半纏」と呼ぶことを教えてくれてありがとう。それは今、そのほかの高価なリネンと一緒に樟脳の木で作られたタンスに収められている。このタンスは一九四八年に［ギルバート諸島から、アフリカの］ウガンダへ転勤する際、イングランドへ向かう途中のオーシャン島で購入したものだ。

79 ある捕虜は原田源燈にオーバーコートを贈った。こうした衣料は当時貴重品で米 1 俵と交換することができ、戦後胃を患った原田にお粥を与えることができた。一九〇三［明治 36］年生まれの彼は、数え年の 71 歳で亡くなった。〔長男原田博夫の話から抜粋〕

80 「［略］役場から連絡があって明日十一時の電車で捕虜が国へ帰るから皆（ママ）んな注意し戸締まりをするようにとのことであった。その日は家（マ）内中店（マ）を閉めて二階の窓から捕虜の帰るのをおそるおそる見送った。その時驚いた事には私達は命がけで戦争をしていたのにアメリカの人達は各々ギターを持ち、両手に大きなボストンバッグをぶらさげてまるで旅行の帰りみたいな顔をしていた。私達を見つけるとふり返り手を振り振り通って行った。それでも見送りに行った人達があって、その人達は毛布を貰ったり衣類を貰ったとかで、そんな事なら皆んな見送りに行けばよかったと後でくやしがったものでした」。［前掲『天龍村史下巻：仲間みつ乃』. p.1199.］

81 缶詰の詳細は p.172.参照。

# 長野県・満島収容所

## 捕虜生活と解放の記録

非売品

作成地：静岡県浜松市
作成年：２０１３年
増訂１版：２０１７年４月 16 日
増訂２版：２０２０年８月 24 日
著　者：チャールズ・F・ウィリアムズ
アルフレッド・A・ワインスタイン
オリバー・L・ゴードン
編　集：名倉有一
翻　訳：名倉有一、名倉和子
連絡先：(E-mail) nagura95@gmail.com

© Charles F. Williams 1993
© Alfred A. Weinstein 1947, 1948
© Oliver L. Gordon 1957